



特定非営利活動法人 海苔のふるさと会 会報

大森 海苔のふるさと館 ニュース 16号

大森海苔漁業の思い

特定非営利活動法人海苔のふるさと会 副理事長 中村博



海苔漁業は、毎年九月一日に豊作と海上の安全を祈願する「建方祭」で一年がはじまる。海苔漁が終わってしまっただけでも、鎮守浦守稲荷神社で執り行われている。

秋とはいえまだ日中は暑く、河岸での仕事は、ヒビ（竹棒）仕度やせつころ（フジツボ）落として大忙しです。仕事を終え、家に帰る途中近所の家々では、晩ご飯のおかずのサンマを焼く匂いや煙がもうもうと立ち昇っていた。疲れた体には、なんともいえぬ秋の心地よさを感じさせる夕暮れであった。

■九月～十月

移植場※に張る網を家の前の道路に広げ、長さ二十五間（約四十五メートル）もの網を五枚重ね、丸めて一つ網にする。移植に行く前日は、午後から船に食糧や水を積み込み、シートを掛けて明日を待ち、当日は夜が明けぬうちに河岸を離れ、一路、千葉県の移植場（八幡・久保田など）へ向かう。海が凪ている時は、一面に油を流した様に穏やかである。海面には時折、スナメリ（ネズミイルカ科の哺乳類）の姿も見られ、快適な船路である。

現地での網張りですが、水温は約二十一度位の中、当時は胸までのゴム長靴は買ってもらえず、ボウタ着のまま海に飛び込んでの作業でした。作業を終え船を浅瀬に泊めて船内で一夜を明かすのですが、船底に「ピチャピチャ」と打ち寄せた波の音で眠れぬ夜を過ごした事もあった。

■十一月 本格的な海苔取りのはじまり

九月下旬に移植場に張っておいた種付網を取りに行き、大森下の漁場に張り、後は手入れを待つ。

家では、海苔乾燥場作りや海苔つけ場の支度で夜なべ仕事になることもよくあった。七五三のお祝いの頃には、早いものでは新海苔の初摘みの時期になり、数は少ないが色艶の良い新海苔が出回る。

■十二月～二月

最盛期には、深夜の二時に起床する事もよくあり、寒い中、暖房もない海苔つけ場では裸電球の明かりの下で、海苔切りまな板の音も高く、母親の作ってくれた熱い甘酒を飲み、体を温めながら海苔つけに励んだものです。外の空気は冷たく、ガラス窓には沢山の氷柱が垂れ下がり、一年の中で最も厳しい寒さでの作業であった。

つけあがった海苔簀を乾棒に掛け、夜が明ける頃外に乾し出すが、あまり早過ぎると、氷付いてしまうので十分注意しなくてはならない。天気の良い日は乾燥場で海苔乾しをするが、家々の煙突からは石炭の煙が立ち昇り、これもまた海苔屋街の象徴たる風景でした。

このように海苔製造業者の一年が過ぎていきます。そして、非常に残念なことに、経済の急成長とは裏腹に昭和三十八年で海苔漁は幕を閉じた。本当に寂しかった。これから先どうしたら良いのか途方に暮れ、「陸に上がったカツパ」と仲間同士で夜通し談義したものであった。

海苔漁を通じ、数え切れぬほど多くのことを学び、何よりも貴重で輝かしい思い出となった。

海苔漁の終結から四十五年の歳月が過ぎ、夢にも思わぬ出来事が平成十九年の暮れに起こりました。絶滅危惧種とまで言われた「アサクサノリ」が「大森ふるさとの浜辺」で復活したのです。かつての海苔の本場「大森」に相応しく、黒くて色艶の良い海苔が採れて大変感激いたしました。

「大森 海苔のふるさと館」では本場大森海苔産業の先人達が使用した諸道具をはじめ、沢山の貴重な資料が保存・展示されており、是非多くの方々が大森海苔の歴史と文化に触れていただき、そして何よりも、この輝かしい歴史が時代と共に風化することなく永く語り継がれることを切に願うものであります。

※移植 海苔網に海苔の種（胞子）を付け、発芽してから、漁場に網を張ること。海苔の種が付きやすい場所と、海苔が生育しやすい場所は異なり、大森では主に千葉方面で種付けを行った。

（この文章は、「おもしろひがし地域情報『いつつのわ』第七〇号」（わがまち大田区大森東地区推進委員会平成二十年七月）に掲載したものを再掲載させていただきました。）



夜明け前の海苔つけ風景

浜辺の生き物探検隊

毎年、夏休みには、東京海洋大学との協働事業として、ふるさとの浜辺の生き物を通して、身近な海とわたしたちのくらしの関わりについて学ぶ体験学習会を行っています。企画を担当した、東京海洋大学大学院1年の神崎かおりさんの報告です。

大森 海苔のふるさと館 (以下、ふるさと館) では7月25日 (日) と8月22日 (日) に「浜辺の生き物探検隊」を実施いたしました。

当日は元気な約20名の子どもたちがふるさと館に集まり、自己紹介のあとグループに分かれて大森ふるさとの浜辺公園 (以下、ふるはま) に出かけました。子供たちは大学生と一緒に一生懸命に生き物を探して、網などで捕まえました。ふるさと館では、採集した生き物を水槽に入れて様子を観察し、「どこにどんな生き物がいたかな?」ということを読み出しながら、大きな模造紙を広げて「ふるはまマップ」を作りました。その



マップから、ふるはまは小さな稚魚たちが育つための大切な「魚のゆりかご」であることや、人間も生き物たちもふるはまの周りで共に生活していることをグループ活動で確かめました。



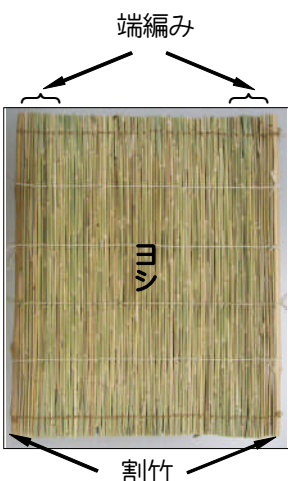
今回の催しでは保護者の方々にも多くご参加いただきました。ふるはまでは生物採集にご協力いただき、またふるさと館では一緒に環境について考えることができました。身近な環境を見守る (観察する) ことは、環境を守ることのスタート地点です。是非、ふるはまに足をお運びいただき、生き物を観察してみませんか? (東京海洋大学: 神崎かおり)

ヨシ刈り作業と海苔簀編み体験 ~夏から秋にかけての海苔作業~



7月22日 (金)、元海苔生産者と共に「海苔簀編み」に使うヨシを刈りに行きました。植物の名前としては「アシ」です

が、大森の元海苔生産者たちは「ヨシ」と呼びます。「善し悪し」の「悪し」に通じて、縁起が悪いためだそうです。



今回は当館のサポーターとして活動している「はまどの会」も参加しました。直接指導を受けることで、刈り方や長さの揃え方だけでなく、協力し合って作業を進めていく、そんな昔の雰囲気も感じる事ができたようです。

「海苔簀編み」に使うヨシは、葉っぱの生えている部分が簀の内側になり、根元の部分がその外側になります。この根

元の部分は「端編み」と言い、硬さがあるため、海苔乾し枠の金具にあたる部分に使います。また、ヨシの根本ではなく、ササを使っていた家庭もありました。



その他にも、先人たちの知恵がたくさん詰まった「海苔簀編み体験」、ぜひご参加ください。(りょう)

「海苔簀編み体験」

【日時】9月12日 (日)、10月17日 (日)

いずれも午後1~4時

【対象】小学3年生以上

【定員】各回先着20名

【参加費】無料

【申込み】9月分は受付中。10月分は9月21日 (火) の午前9時から電話にて受け付け。

特定非営利活動法人 海苔のふるさと会会報「大森海苔のふるさと館 ニュース」16号

平成22年9月1日発行
編集・発行 特定非営利活動法人 海苔のふるさと会
連絡先 東京都大田区平和の森公園2番2号

TEL 03-5471-0333

FAX 03-5471-0347